

アシスト

市川市サッカー協会第4種委員会 委員長 石原孝幸

サッカーは不要不急なこと？

7月から一部の学校を除いて、何とか学校の校庭が使えるようになり、子ども達がサッカーのできる環境が増えてきました。3月初めからから6月末まで、約4か月間もの間、サッカーができない状況が続いていましたので、心待ちにしていた子ども達の喜びは大きかったと思います。

私自身がコーチとして関わっているクラブも7月から活動を再開しました。子ども達は、最初のうちは接触を避ける練習に戸惑いを見せつつも、とにかく外で思い切りボールを蹴ったり、走ったりすることが楽しくて仕方がないという感じでした。8月に入り、少しずつゲーム形式の練習もできるようになり、相手との駆け引きや味方との連携、ゴールを決める爽快感等、サッカー本来の楽しさを取り戻しつつあります。

また、練習を始める前の、検温、手洗い、終わった後の消毒の徹底や、他と距離を置いて荷物を置く、マスクをしても会話は少なく等の注意事項も身に付き、感染防止が生活の一部となってきたようにも思います。これからも、感染防止に努めつつ、子ども達が楽しみにしているサッカーを、言わば両立する形で行っていかうと思います。

さて、コロナ禍の中「不要不急の外出はお控え下さい。」というフレーズをよく耳にするようになりました。それまでも台風が迫っている時などに、外出の自粛を促すために使われていたフレーズです。コロナ禍でこのフレーズが使われ始めた頃は気にならなかったのですが、この頃色々考えてしまうようになりました。

「不要なこと？その人にとっては必要なことだろ。」「不要といえ、すべての事が不要なことでもあるし、その逆もあるな。」「必要なことでも不急なことはあるな、急いでやらなくてもいいことはあるな」サッカーを例にすると、最初の内は、単純に控えなければと思っていたのが、「サッカーは決して不要なもの、いらぬものではないな。でも、急いでやらなくてもいい時はあるな。」と考えるようになったということです。

また、このフレーズの使われ方も、最初の内は「命にかかわらない外出はさける」という意味合いで使われていたように思いますが、それでは人々は家にずっといることになり、社会経済が回らなくなってきたため、緊急事態宣言解除とともにこのフレーズの意味合いも緩和され、感染防止を徹底しつつ自己判断に任せるという意味合いになってきたように思います。

今回、「松木サッカーフェスティバル交流戦」を開催するにあたっては、まず、子ども達にとってサッカーのゲームができる環境は必要な事と考えました。子ども達が一番好きなのは間違いなく自分が出場できるゲームです。少なくとも4か月間我慢している子ども達に、何とかプレゼントしたいと考えました。そして必ず全員が出場できるような規則を考えました。

そしてもちろん、感染防止を徹底することも考えました。市の施設を借用しますので、施設の方針に合わせた感染防止対策を実行すること。保護者の観戦を無くすこと（実はこれが一番密になると言われています）。集まる子ども達の数を少なくするため、一つのコートに集まるのは最大4チームとし、どのチームも2試合だけにすること。なるべく接触を避けられるような試合開始から終了までの流れを示すこと。各ベンチに手や器具の消毒液、非接触体温計等のキットを用意すること。等の徹底を図ることになりました。

これで何とか、子ども達にとって必要な、サッカーのゲームができる環境作りは見込みが立ちました。次は、不急かどうかです。主に支部長を中心に意見交換をしました。「これだけ長い間、何も無いのはかわいそうだ」「7月から練習ができるようになったから、体もだいぶついてこられるようになっている」「6年生は最後だから何とかやらせてあげたい」「東京都など他県では当たり前に対外試合がはじまっている」「9月からは県大会のリーグ戦が始まるし問題ないだろう。」等の意見で一致し、開催の運びとなりました。

とはいえ、やはり感染は心配です。感染防止を徹底しても感染してしまったとの報道も数多く寄せられています。どれだけ感染防止をしても、感染の心配は「0」とは言い切れません。でもそれでは何もしないでいいかという、それも違うと思うのです。できる限り模索すべきと思うのです。

感染の心配が「0」ではないのは確かですから、当たり前ですが参加は強制できません。大変恐縮ですが、チームとしても個人としても自己判断で参加ということをお改めをお願いした次第です。そして参加する方には、チームとしても個人としても、感染防止の徹底を真剣にお願いします。みなさんの協力ですべて何とか感染「0」にしたいのです。

短い夏休みが終わり、8月18日から学校が再開しました。学校はもちろん不要なところではありません。学校では感染防止を徹底して子ども達を迎え入れ、感染「0」を目指しています。

私は、サッカーも、学校と同じくらい、子ども達に必要とされていると思っています。私達は今まで、日々の活動で、仲間とともにサッカーを楽しむ子ども達、サッカーが大好きで仕方がないという子ども達を育ててきたはず。このような子ども達は、学校と同じくらい、サッカーをすることが大切で必要なことになっていると思うのです。このような子ども達のために、学校と同じように感染防止を徹底し、誰もがゲームに出場して楽しめる場を整え、子ども達の願いを叶えてあげたいのです。

「サッカーは不要ではない。感染防止を徹底しつつ、不急かどうかはその都度状況をよく考えていく。」しばらくの間はこの考えでいこうと思います。

— 訃報 —

令和2年6月10日。市川市サッカー協会第4種委員会副委員長であり、市川KIFC代表の荒田正勝氏をご逝去されました。享年77歳でした。

荒田さんは、市川市の少年サッカーがまだ部活動が主流だった時代から、市川KIFCの前身の稲越小サッカー一部の地域指導者としてグラウンドに立たれ、その後市川市の少年サッカーが社会体育の形式となっても、地域クラブ市川KIFCの代表として活躍されました。市川市の少年サッカーの黎明期から凡そ40年近く常に先頭に立ち、私達指導者を牽引して下さいました。そして多くのサッカー少年少女を育て上げてくれました。また、第4種委員会副委員長として、4種委員会の発展に大きく貢献してくれました。荒田さんを亡くしたことは4種委員会としても大きな喪失感を感じています。

荒田さんがサッカーで一番大事にされていたこと。それは「勝負に対するこだわり」だと思います。「強い方が勝つのではなく、勝った方が強いのだ」という名言がありますが、これを地で行き、しかも貫き通した方でした。

試合中、ベンチで選手を鼓舞し叱咤激励する姿は、荒田氏の変わらない姿勢でした。また練習には決して手を抜かない方でした。勝つためにはまずはしっかりと練習することが当たり前。そして指導者は常にグラウンド立ち練習の様子を見届けること。このことを徹底されていたように思います。

一見すると厳しすぎるようにも思えた試合中の荒田さんの叱咤激励ですが、練習中常にグラウンドに立ち見守ってくれていたのを知っている選手には、私達にはわからない、別の言葉に聞こえていたのだと思います。

もう荒田さんの、あのグラウンド中に轟く声が聞けないと思うと、寂しくて仕方がありません。

亡くなる直前まで、子ども達がコロナ禍でサッカーができないことを憂いておられたと伺っております。

サッカーを愛する子ども達にとって、サッカーのできる環境は決して不要なものではありません。私たちは荒田さんの意思を受け継ぎ、子ども達のためにさらにより良い環境作りを進めていかなければならないと思います。

永い間ありがとうございました。安らかに眠り下さい。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。 合掌